

# 史跡 茅原大墓古墳

第1次～第4次発掘調査概要報告書

2011. 8. 5

桜井市教育委員会





# 史跡 茅原大墓古墳

第1次～第4次発掘調査概要報告書

2011. 8. 5

桜井市教育委員会





## 序

私たちの桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約7割を山地が占める自然の豊かなまちです。しかし近年は平地部を中心に開発が進み、市民生活の利便性が向上する一方で、かつての桜井市の姿が失われつつあります。市内には全国的にも注目される貴重な文化財が数多く分布しており、この地域が古代におけるわが国の中心地であったことが知られています。

そうした貴重な文化財の一つである茅原大墓古墳は、帆立貝形の墳丘形態がよく保存されており、昭和57年には国史跡に指定されています。桜井市ではこの茅原大墓古墳の史跡整備を計画しており、それに先立って平成20年度より国・県の補助を受けて発掘調査を実施してきました。本書では平成22年度までに得られた茅原大墓古墳の調査成果の概要をおさめております。

現地調査にあたりましては指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、酷暑・厳寒のなか作業に従事して頂いた作業員・学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力して頂いた整理員の方々に深く御礼申し上げます。

本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資するところとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

平成23年8月5日

桜井市教育委員会

教育長 雀部克英

# 例 言

1. 本書は奈良県桜井市教育委員会が実施した、史跡整備に先立つ茅原大墓古墳の発掘調査概要報告書である。本報告書では平成22年度までに実施された第1次～第4次調査の成果を報告している。
2. 調査主体：桜井市教育委員会  
教育長 雀部克英、事務局長 松田至功、事務局次長・文化財課長 竹田勝彦、  
文化財課主幹 川本光司、文化財係長 橋本輝彦、主任 松宮昌樹、福辻淳、丹羽恵二、  
技師補 森暢郎、臨時職員 木場佳子、福家恭、武田雄志、苅谷史穂、西岡恵美
3. 調査担当者：橋本輝彦（第1次調査） 福辻淳（第2～第4次調査）
4. 調査補助員：栢本あずさ、村上薫史、小川裕子、小湊久美子、立田理、堂浦千景、友永奈津子、  
甲谷晋平、相場さやか、小島宏貴、竹内葉月、山本若菜、小野善範、奥本恵里、  
広瀬侑紀
5. 調査作業員：植田光雄、平岡高雄、佐野圭造、植西キヨ、嶋岡道子、辻カズコ、井上久幹、  
上田猛、宮前秀年、高奥恵子、中西智子、澤田巳喜雄、宮久保吉暉、甲谷郷美、  
生島紀夫、南幸弘、森貞之
6. 整理作業および報告書作成：上記補助員および 松本紀代乃、藤井妙子、嶋岡由美、木下理恵、  
奥田佳代子、西田千秋、井ノ本奈津子、北畑陽子、吉川晴美、  
川田美和、柳原唯、太田久仁子、小松令子
7. 現地調査および遺物整理に関し、以下の方々から様々なご指導、ご教示を頂いた。ここに記し、  
感謝の意を表します。（敬称略、順不同）  
石野博信（兵庫県立考古博物館）、福永伸哉（大阪大学）、高橋克壽（花園大学）、一瀬和夫（京都橘大学）、苅谷俊介（日本考古学協会）、萩原儀征（同）、寺沢薫（桜井市纏向学研究センター  
設立準備顧問）、宮原晋一（奈良県立橿原考古学研究所）、東影悠（同）、坂靖（奈良県立橿原考  
古学研究所附属博物館）、小池香津江（奈良県教育委員会文化財保存課）
8. 執筆・編集者：本書の執筆・編集は福辻がおこなった。
9. 本書における方位・座標はすべて世界測地系によるものを示している。方位は座標北を表し、レ  
ベル高はすべて海拔高（T.P）を表す。
10. 図版の遺物番号は、該当する各節の図の遺物番号に対応する。
11. 出土遺物をはじめ調査記録一切は、桜井市教育委員会において保管している。活用されたい。

表紙写真：後円部2段目の埴輪列

裏表紙写真：盾持人埴輪



# 目 次

序

例言

目次

表・挿図・図版目次

第1章 位置と環境 .....	1
1. 地理的環境	
2. 周辺の遺跡	
第2章 調査の経緯と経過 .....	4
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の経過	
第3章 調査成果の概要 .....	6
1. 古墳の現況	
2. 墳丘の形態	
3. 周溝の形態	
4. 葺石	
5. 埴輪の配列	
6. 埴輪棺	
7. 出土遺物	
第4章 まとめ .....	26

図版

抄録

## 表 目 次

表 1	茅原大墓古墳調査一覧	4
-----	------------	---

## 挿 図 目 次

図 1	桜井市北西部の遺跡分布 (S = 1 / 25,000)	2
図 2	茅原大墓古墳周辺の遺跡分布 (S = 1 / 8,000)	3
図 3	トレンチ配置図 (S = 1 / 1,000)	5
図 4	茅原大墓古墳墳丘測量図 (S = 1 / 800)	7
図 5	茅原大墓古墳トレンチ位置図 (S = 1 / 800)	8
図 6	後円部南側・南西側のトレンチ平面・断面図 (S = 1 / 100)	9
図 7	墳丘東側のトレンチ平面・断面図① (S = 1 / 100)	10
図 8	墳丘東側のトレンチ平面・断面図② (S = 1 / 100)	11
図 9	前方部北側・西側のトレンチ平面・断面図 (S = 1 / 100)	12
図10	墳丘上のトレンチ平面・断面図 (S = 1 / 100)	13・14
図11	前方部東側上面のトレンチ平面図 (S = 1 / 100)	15
図12	茅原大墓古墳墳丘復元図 (S = 1 / 800)	17
図13	墳丘北東側のトレンチ配置図 (S = 1 / 300)	18
図14	埴輪棺平面・断面図 (S = 1 / 30)	21
図15	後円部頂埴輪列の円筒埴輪 (S = 1 / 6)	23
図16	後円部 2 段目埴輪列の円筒埴輪 (S = 1 / 6)	24
図17	周溝埋土・石垣裏込め土 出土埴輪 (S = 1 / 6)	25



## 図 版 目 次

- 図版 1 茅原大墓古墳と三輪山（西より）  
茅原大墓古墳と箸墓古墳（南東より）
- 図版 2 茅原大墓古墳全景（下が北）  
第 4 次調査地全景（下が北）
- 図版 3 第 1 次調査第 1 トレンチ（西より）  
後円部南西側の転落石（西より、1 次 1 tr）  
第 1 次調査第 2 トレンチ（東より）
- 図版 4 第 2 次調査トレンチ全景（東より）  
前方部東側面の葺石（東より、2 次 tr）
- 図版 5 葺石裏側の盛土（北より、2 次 tr）  
第 3 次調査第 1 トレンチ全景（西より）
- 図版 6 第 3 次調査第 2 トレンチ全景（東より）  
後円部頂西側の埴輪列（北西より、3 次 2 tr）
- 図版 7 第 3 次調査第 3 トレンチ全景①（南より）  
第 3 次調査第 3 トレンチ全景②（北より）
- 図版 8 後円部頂北側埴輪列の上面検出状況  
（西より、3 次 3 tr）  
後円部頂北側の埴輪列（北東より、3 次 3 tr）
- 図版 9 後円部 2 段目北側の埴輪列  
（北東より、3 次 3 tr）  
後円部北側斜面の葺石  
（手前は前方部上面、3 次 3 tr）
- 図版 10 第 3 次調査第 4 トレンチ全景（北より）  
後円部 2 段目南側の埴輪列  
（南より、3 次 4 tr）
- 図版 11 第 3 次調査第 5 トレンチ全景（南より）  
第 4 次調査第 1 トレンチ（東より）
- 図版 12 周溝内埋土断面（北東より、4 次 1 tr）  
後円部東側の葺石（東より、4 次 1 tr）
- 図版 13 東側くびれ部付近の転落石・埴輪検出状況  
（東より、4 次 2 tr）  
東側くびれ部（東より、4 次 2 tr）
- 図版 14 盾持人埴輪基部とくびれ部付近の葺石  
（東より、4 次 2 tr）  
第 4 次調査第 3・4 トレンチと墳丘  
（北東より）
- 図版 15 前方部東側 2 段目斜面の葺石  
（北東より、4 次 5 tr）  
埴輪棺上面検出状況①（西より、4 次 5 tr）
- 図版 16 埴輪棺上面検出状況②（南より、4 次 5 tr）  
埴輪棺棺内検出状況①（南より、4 次 5 tr）
- 図版 17 埴輪棺棺内検出状況②（西より、4 次 5 tr）  
後円部北東斜面の葺石  
（手前は前方部上面、4 次 5 tr）
- 図版 18 第 4 次調査第 6 トレンチ全景（北より）  
前方部前面の葺石（北より、4 次 6 tr）
- 図版 19 周溝外側の立ち上がり（南西より、4 次 6 tr）  
前方部前面の周溝内埋土断面  
（南西より、4 次 6 tr）
- 図版 20 出土埴輪①
- 図版 21 出土埴輪②
- 図版 22 盾持人埴輪  
顔面部分  
頭部の側面





# 第1章 位置と環境

## 1. 地理的環境

茅原大墓古墳が所在する桜井市は、奈良県北部に位置する人口約6万人、面積98.93km<sup>2</sup>の都市であり、北は天理市・奈良市、西は田原本町・橿原市、南は明日香村・吉野町、東は宇陀市と境を接している。桜井市域の標高はおよそ60mから900m以上に及んでおり、標高100m前後を境として平地部と山地部に分けることができる。山地部は市域の約3/4を占めており、標高800mを超える山々が連なる。北東部の大和高原では初瀬川が南流し、南部の竜門山地では寺川が北流してそれぞれ浸食谷を形成し、平地部へと至っている。市域の北西部にひろがる平地部は、奈良盆地の東南部にあたっており、市域全体の約1/4を占めている。このように当市域は、北西側の奈良盆地と、紀伊山地や大和高原へと連なる山地部、すなわち国中と山中の結節点に位置している。桜井市街地の発達はこの地理的要因によるところが大きく、現在の市街地付近からは、古代以来の交通路が東西・南北方向へと通じている。

茅原大墓古墳は桜井市北部の大字茅原に位置しており、付近は古くから信仰の対象とされてきた三輪山の西麓にあたる。周辺の標高は80m前後で、奈良盆地東縁の傾斜地に立地することから、墳丘上からは盆地の広い範囲を見渡すことができる。古墳の南側には茅原集落が存在するが、これを除く三方には耕作地がひろがり、高く盛り上がった墳丘の姿は遠くからも望むことができる位置環境にある。

## 2. 周辺の遺跡

桜井市域では北西側の平地部において遺跡が多く分布しており、平地部を南東から北西へと貫流する初瀬川の北側一帯と、桜井市街地南側の丘陵縁辺部において、特に重要な遺跡が集中してみとめられる。

茅原大墓古墳が位置する初瀬川の北側では、縄文時代中期以前に遡る遺跡は少なく<sup>1)</sup>、後期・晩期になると芝遺跡や纏向遺跡において遺物の出土が報告されるようになる。

弥生時代では、芝遺跡において前期から後期後半にいたるまで集落が営まれており、奈良盆地東南部における拠点的な集落であったと考えられる。弥生時代末～古墳時代初頭になると、芝遺跡の集落が衰退する一方で、その北側において纏向遺跡の大規模集落が出現する。纏向遺跡は東西約2km、南北約1.5kmの範囲にひろがる古墳時代前期の大規模集落遺跡で、他地域の影響を受けた外来系土器が多数出土しており、その範囲は関東から九州までの列島の広範に及んでいる。また最初の大王墓と考えられる箸墓古墳をはじめ、纏向石塚古墳（墳丘墓）やホケノ山古墳（墳丘墓）など前方後円墳出現期の大型墳墓が複数存在している。こうしたことから纏向遺跡は、奈良盆地のみならず日本列島の広い範囲における、中心的な集落であったと考えられる。

茅原大墓古墳の周辺では、上記の古墳時代初頭の墳墓以外にも、多数の古墳が存在することが知られている。特に大字茅原から箸中にかけては様々な規模の古墳が点在するが、その多くは築造時期や



- |          |           |             |           |           |            |
|----------|-----------|-------------|-----------|-----------|------------|
| 1 為川南方遺跡 | 8 勝山東古墳   | 15 シウロウ塚古墳  | 22 堂ノ後古墳  | 29 茅原遺跡   | 36 大神神社禁足地 |
| 2 檜垣遺跡   | 9 石塚東古墳   | 16 立子塚古墳    | 23 ホケノ山古墳 | 30 茅原狐塚古墳 | 37 三輪遺跡    |
| 3 大西遺跡   | 10 東田大塚古墳 | 17 珠城山古墳群   | 24 平塚古墳   | 31 車谷遺跡   | 38 三輪城跡    |
| 4 纏向遺跡   | 11 メクリ1号墳 | 18 巻野内石塚古墳  | 25 芝遺跡    | 32 桧原遺跡   | 39 大神神社境内地 |
| 5 矢塚古墳   | 12 柳本大塚古墳 | 19 箸中ビハクビ古墳 | 26 芝村陣屋跡  | 33 箕倉山遺跡  | 40 新屋敷遺跡   |
| 6 勝山古墳   | 13 上の山古墳  | 20 箸中イツカ古墳  | 27 毘沙門塚古墳 | 34 馬場遺跡   | 41 上ツ道     |
| 7 纏向石塚古墳 | 14 渋谷山古墳  | 21 箸墓古墳     | 28 茅原大墓古墳 | 35 大神寺跡   |            |

図1 桜井市北西部の遺跡分布 (S = 1/25,000)

墳丘形態が明らかになっていない。このうち築造時期が判明しているものとしては、古墳時代初頭の箸墓古墳、ホケノ山古墳のほか、前期末～中期前葉頃の箸中ビハクビ古墳、箸中イツカ古墳、茅原大墓古墳、中期後半頃の堂ノ後古墳、中期末～後期初頭頃の平塚古墳、毘沙門塚古墳、後期末頃の茅原狐塚古墳、馬塚古墳などがある。このほか横穴式石室を主体とする古墳として弁天社古墳や慶運寺裏古墳などが知られており、付近には前期のみならず中・後期の古墳が多数存在しているものと考えられる。

なお桜井市北部には記紀にみられる宮都の伝承地が存在するが、これらを含め、纏向遺跡の集落が衰退する古墳時代前期前半以降の集落に関しては不明な部分が多い。したがって上記の古墳は、当該期の桜井市北部地域を考える上で重要な資料であるといえる。また近年では纏向遺跡において、貼石を伴う溝が確認され、古墳時代中期末頃の居館が存在した可能性が考えられる<sup>11)</sup>。今後の調査においてその性格が明らかにされることを期待したい。





- |            |          |           |           |           |           |
|------------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 箸中ビハクビ古墳 | 6 原田古墳群  | 11 小川塚古墳  | 16 慶運寺裏円墳 | 21 馬塚古墳   | 26 毘沙門塚古墳 |
| 2 堂後古墳群    | 7 八王子塚古墳 | 12 平塚古墳   | 17 慶運寺裏古墳 | 22 南石神塚古墳 | 27 茅原大墓古墳 |
| 3 箸墓古墳     | 8 神上塚古墳  | 13 堂ノ後古墳  | 18 北石神塚古墳 | 23 狐塚古墳   | 28 堀ノ端古墳  |
| 4 箸中イヅカ古墳  | 9 茶ノ木塚古墳 | 14 宮ノ前古墳  | 19 ツツロ塚古墳 | 24 藤が森古墳  | 29 茅原狐塚古墳 |
| 5 稲荷山古墳    | 10 北口塚古墳 | 15 ホケノ山古墳 | 20 ツクロ塚古墳 | 25 三光古墳   | 30 弁天社古墳  |

図2 茅原大墓古墳周辺の遺跡分布 (S = 1/8,000)

【註記】

- 1) 川村和正 2000「箸中遺跡出土の縄文資料について」『大和の縄文時代』桜井市立埋蔵文化財センター
- 2) 奈良県立橿原考古学研究所 2008『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果第10冊
- 3) 桜井市立埋蔵文化財センター 2010「箸中ビハクビ古墳」『纏向へ行こう！』
- 4) 米川仁一 2001「纏向遺跡第119次・121次調査概報」『奈良県遺跡調査概報 2000年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 5) 丹羽恵二 金松誠 2011「纏向遺跡第164次(堂ノ後古墳第1次)発掘調査報告」『桜井市平成21年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 6) 福辻淳 2004「纏向遺跡第135次発掘調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 7) 清水眞一 1994「茅原遺跡第4次調査」『桜井市内埋蔵文化財1993年度発掘調査報告書』(財)桜井市文化財協会
- 8) 網干善教 1959「大和三輪狐塚古墳について」『古代学』第8巻第3号
- 9) 奈良県教育委員会 1956「磯城郡大三輪町箸中宇南浦馬塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第8輯
- 10) 丹羽恵二(編) 2010『桜井の横穴式石室を訪ねて』(財)桜井市文化財協会
- 11) 桜井市教育委員会 2009『纏向遺跡第166次調査現地説明会資料』1

## 第2章 調査の経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

茅原大墓古墳は、帆立貝形の墳丘が良好に保存されている事例として古くから知られ、昭和57年12月18日付けで国史跡に指定されている（指定範囲7,565.86㎡）。桜井市では史跡指定以後、昭和58年度から60年度にかけて用地買収を行い、昭和60年度までに3,553.71㎡の公有地化を完了した。発掘調査が初めて実施されたのは史跡指定より13年余が経過した平成8年2月のことであり、墳丘西側の小池の護岸改修に先立って行われた（第1次調査）。

その後長らく発掘調査は実施されなかったが、平成20年度に茅原大墓古墳の史跡整備に向けて墳丘測量と発掘調査を実施した（第2次調査）。平成21年度には昭和61年度以降中途にあった用地買収を再開し、前年度に引き続いて発掘調査を実施している（第3次調査）。続く平成22年度には、後円部南東側の個人宅地部分と墳丘西側のため池「小池」を除く5,277.72㎡の公有地化を完了した。また用地買収と並行し、墳丘形態の確認を目的とした発掘調査を実施している（第4次調査）。

表1 茅原大墓古墳調査一覧

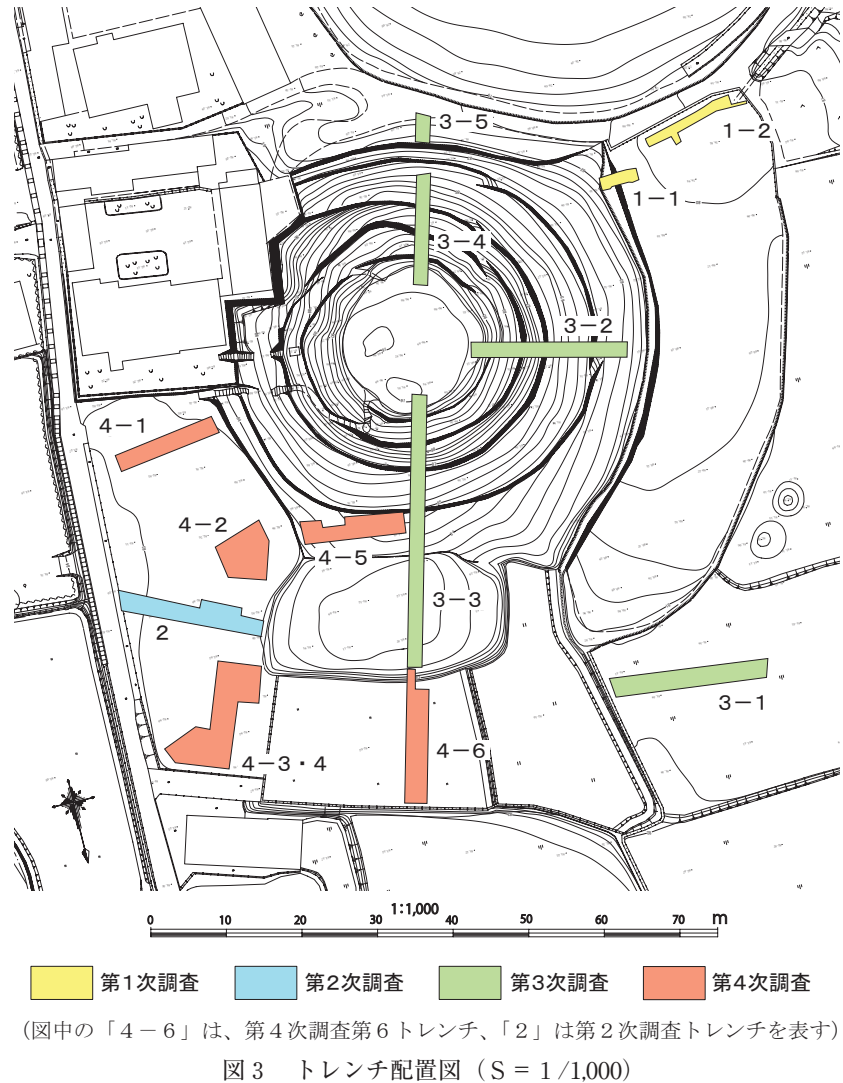
調査回数	調査期間	トレンチ名	調査面積	調査位置	検出遺構など
第1次調査	1996. 2. 19～ 1996. 3. 6	第1トレンチ (1-1)	7.5㎡	後円部南西側	墳丘盛土
		第2トレンチ (1-2)	15.5㎡	後円部南西側	周溝外側の立ち上がり
第2次調査	2008. 9. 5～ 2008. 10. 22	(2)	44㎡	前方部東側	葺石
第3次調査	2009. 10. 23～ 2010. 2. 5	第1トレンチ (3-1)	52㎡	前方部西側	
		第2トレンチ (3-2)	42㎡	後円部西斜面	後円部頂埴輪列
		第3トレンチ (3-3)	72㎡	後円部北斜面～前方部上面	後円部頂埴輪列、後円部 2段目埴輪列、葺石
		第4トレンチ (3-4)	30㎡	後円部南斜面	後円部2段目埴輪列
		第5トレンチ (3-5)	7㎡	後円部南側	墳丘盛土
第4次調査	2010. 11. 16～ 2011. 3. 24	第1トレンチ (4-1)	35㎡	後円部東側	葺石
		第2トレンチ (4-2)	37㎡	東側くびれ部	葺石、盾持人埴輪
		第3・4トレンチ (4-3・4)	80㎡	前方部北東隅 (拡張により第3トレンチ と第4トレンチが結合)	葺石、渡り土堤？
		第5トレンチ (4-5)	38㎡	前方部上面東側	葺石、埴輪棺
		第6トレンチ (4-6)	48㎡	前方部北側	葺石、周溝外側の立ち上がり

## 2. 調査の経過

平成7年度の第1次調査では初めて墳丘盛土が確認されるとともに、周溝外側の立ち上がりが検出された。これにより現在墳丘の西側に存在するため池「小池」が、周溝の形態をある程度反映しているものであることが明らかとなった。平成20年度の第2次調査は、墳丘東側での遺構の保存状況を確認すべく調査トレンチを設置した。その結果、原位置にある葺石を初めて検出するとともに、前方部東側面の葺石が良好な残存状況にあることが判明している。

平成21年度の第3次調査は、主に後円部の段築構造や外表施設の解明を目的として実施している。調査の結果、後円部の墳頂周縁部と2段目と思われる平坦面において埴輪列が確認された。これにより、埋葬施設周辺を除く後円部の上半部の形態がおおよそ復元可能となった。加えてまとまった円筒埴輪資料が得られたことにより、茅原大墓古墳の築造時期が古墳時代中期初頭頃であることが明らかとなっている。調査終盤の平成22年1月23日には地元住民を対象とした現地説明会を実施した（参加者約140人）。

平成22年度の第4次調査は、墳丘東側から北側にかけての墳丘輪郭と、前方部の段築構造・外表施設の確認を目的として実施された。本書で報告するようにこの調査では、墳丘形態に関わるさまざまな成果が得られたが、なかでも最古の事例となる盾持人埴輪の出土が注目された。平成23年2月24日に記者発表、同26日に現地説明会を実施し、約2,000人の参加者が現地の見学に訪れた。





## 第3章 調査成果の概要

### 1. 古墳の現況

#### (1) 墳丘周辺の状況 (図4)

茅原大墓古墳は茅原集落の北端に位置している。墳丘の南側には「丸池」と呼ばれるため池が近接し、南東側は集落北端の民家により墳丘の一部が削平されている。墳丘の西側には後円部に沿って弧を描く「小池」と呼ばれるため池が存在する。その幅は15～20mで、周溝を反映するものであると推定される。

前方部の北側は近年まで水田であったが、この水田面は北側に隣接する畑作地よりも0.7mほど低くなっている。墳丘東側にもかつて水田であった平坦地が存在し、市道を挟んで東側に隣接する水田面よりも約1.7m低くなる状況が観察される。このように墳丘の周辺には周囲よりも低くなる地形が存在しており、その規模は前方部北側では幅約16m、墳丘東側では20m前後を測る。これらについても上記のため池と同様、周溝形態を反映するものと考えられた。

なお小池の西側には、周囲よりも若干高くなる畑作地が存在し、周溝の外側に築かれた外堤である可能性が考えられる。地形環境から墳丘の北側や東側に外堤の存在を推定することは難しく、これが外堤であったとすれば、墳丘西側の限られた範囲にのみ存在したものと思われる。

#### (2) 墳丘の現況 (図4)

墳丘部分は南北長約72mの高まりとして残存し、現況からも前方部を北北東に向ける帆立貝形の前方後円墳であることが観察できる。後円部は径約60mの円丘として残存し、その北側に前方部にあたる東西約30m、南北約15mの方形の高まりが接続するように存在する。

現況の後円部頂の標高は91m前後で、周囲の耕作地からの高さは東側で8m余、西側では10m弱を測る。対して前方部は上面の標高が84m余で、周囲の耕作地との比高は1～2mと低平である。

墳丘部分は、公有地化以前は耕作地として使用されていた。後円部にはそうした耕作地の造成に伴って築かれたと思われる石垣が、5段にわたって組み上げられている。後円部頂には径18～20mの円形の平坦面が存在し、築造当時の墳丘形態を反映するものと考えられた。

前方部は、用地買収が行われた平成21年まで畑作地として使用されており、上面はこれにより若干削平されていると推定される。周囲は北側と西側で急傾斜となっており、特に西側部分は、墳丘が現代の水田面のレベルまで削平されている可能性が考えられた。

### 2. 墳丘の形態

#### (1) 墳丘の平面形態

墳丘の東側に設定した第4次調査第1トレンチ (図7)、第4次調査第2トレンチ (図8)、第2次調査トレンチ (図7)、墳丘北側に設定した第4次調査第6トレンチ (図9)において、葺石を伴う墳丘端の立ち上がりが確認された。また後円部南東側の第1次調査第1トレンチ (図6)では、葺石

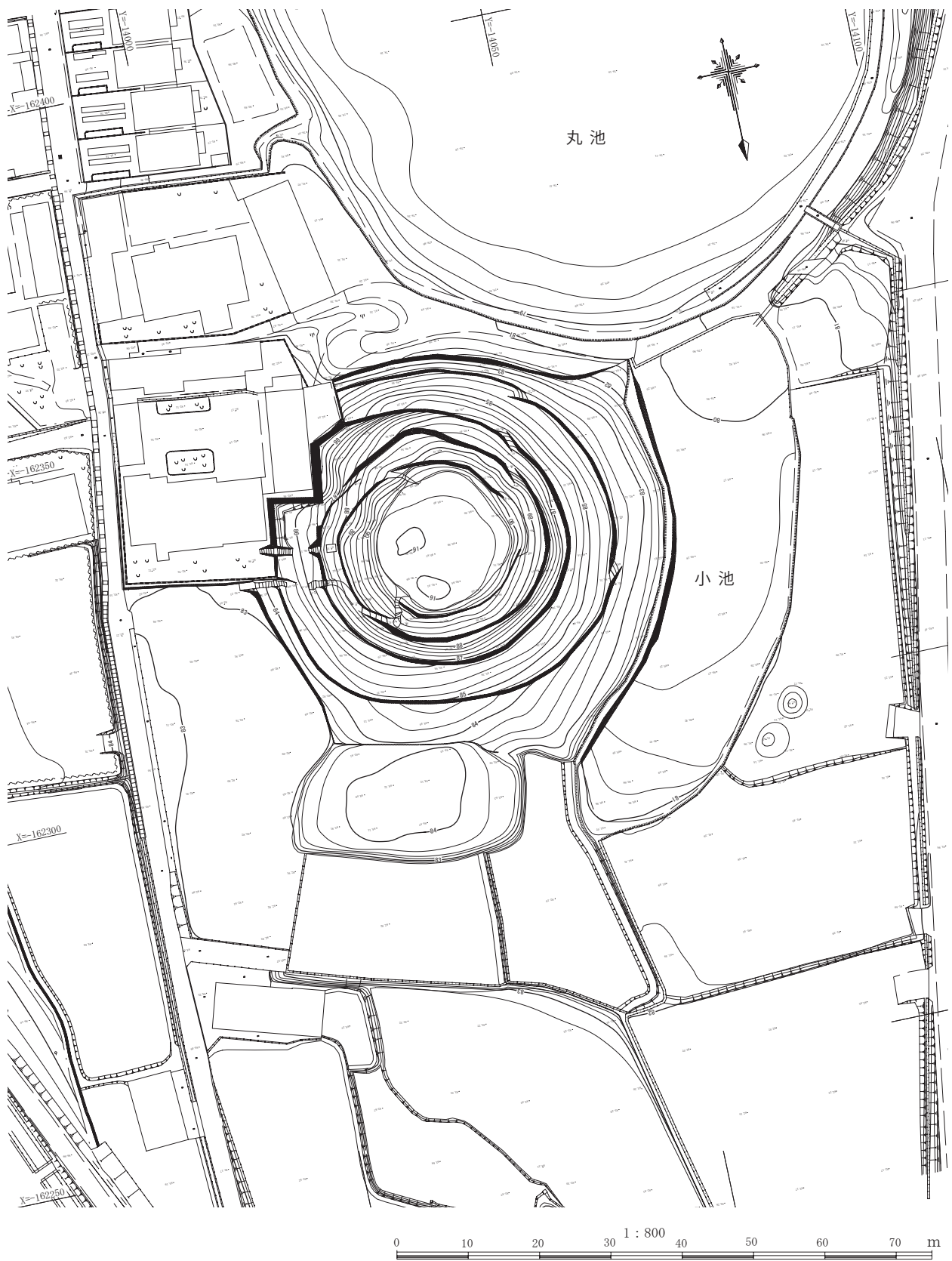


图4 茅原大墓古墳墳丘測量図 (S = 1/800)



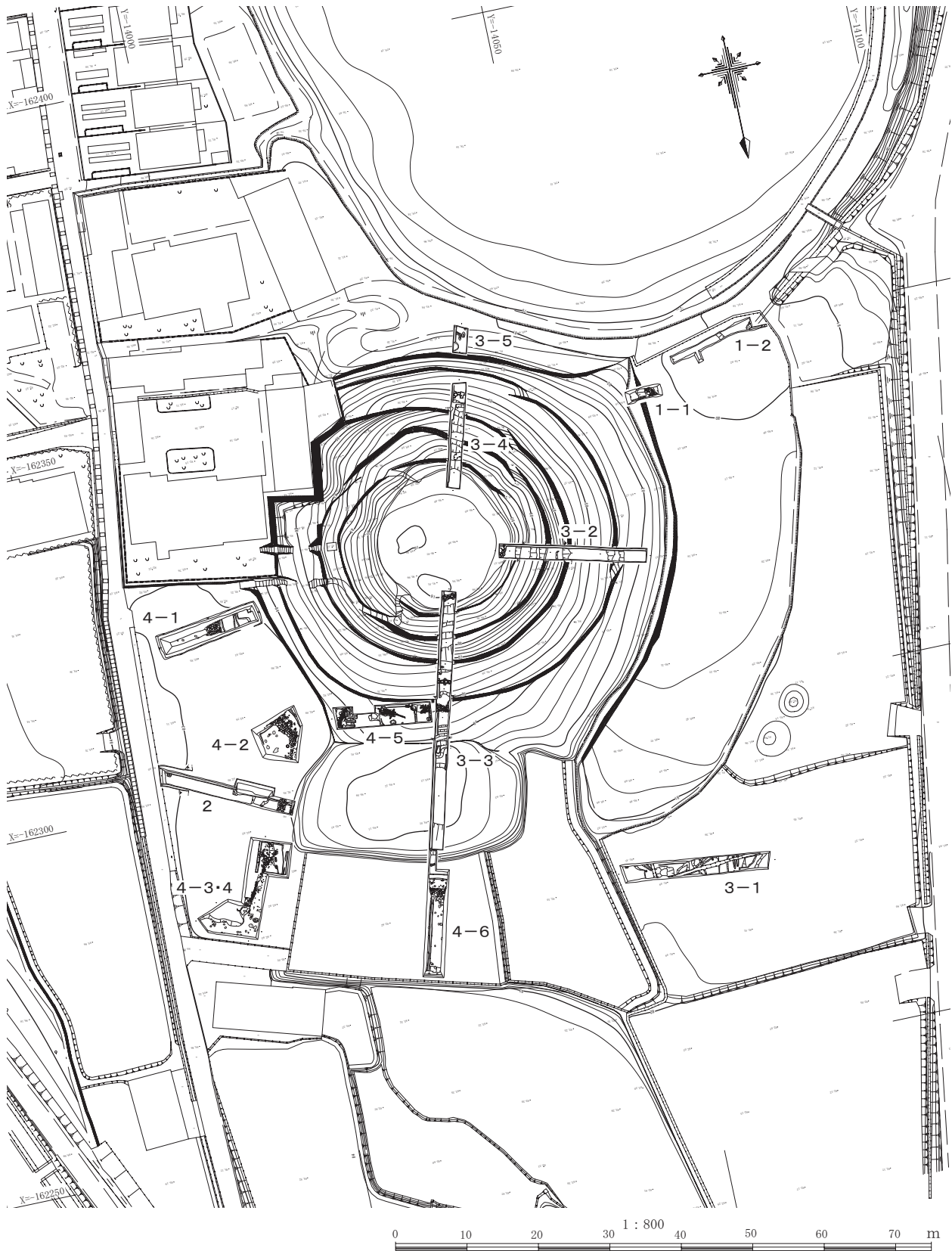


図5 茅原大墓古墳トレンチ位置図 (S = 1/800)

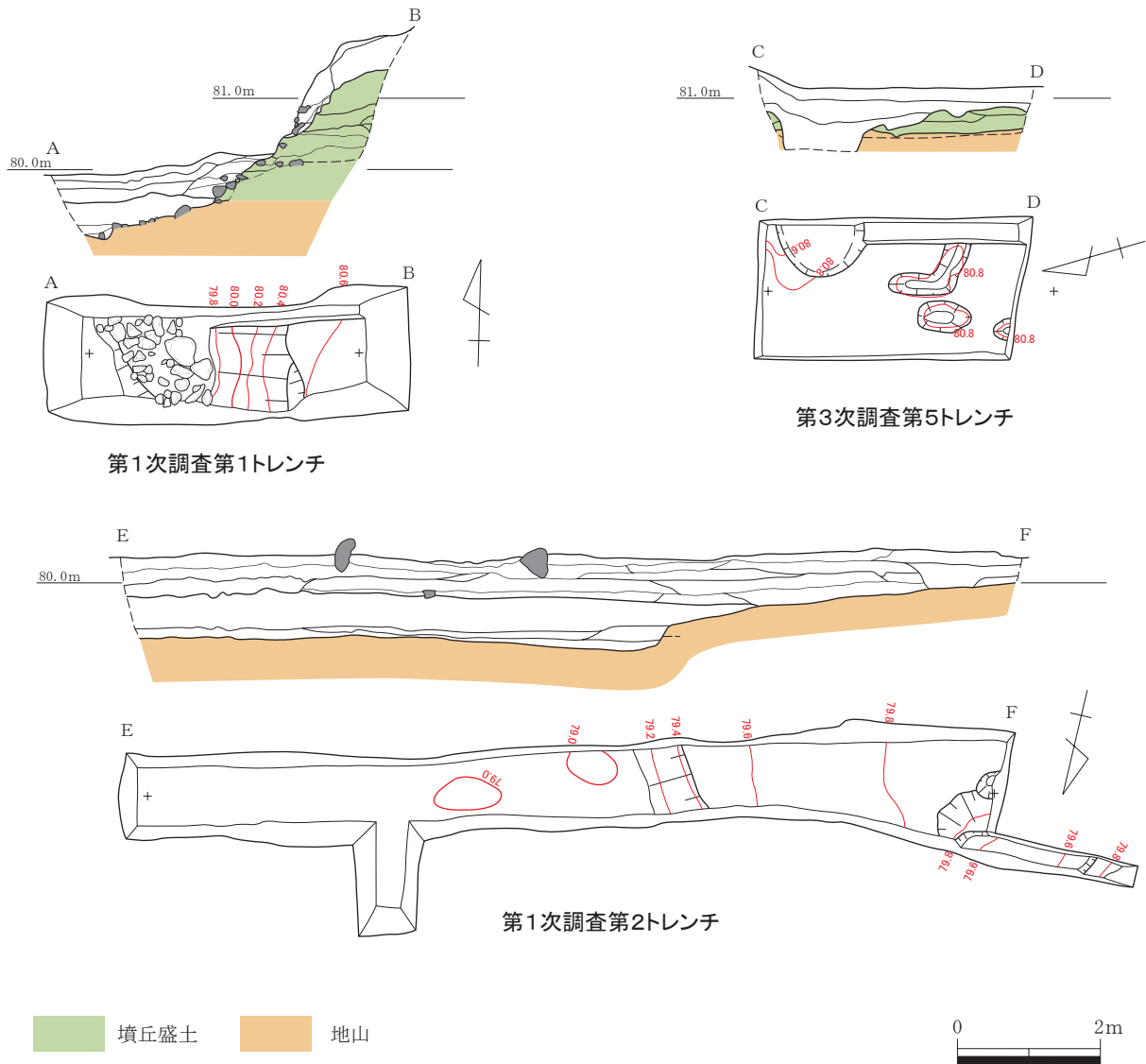
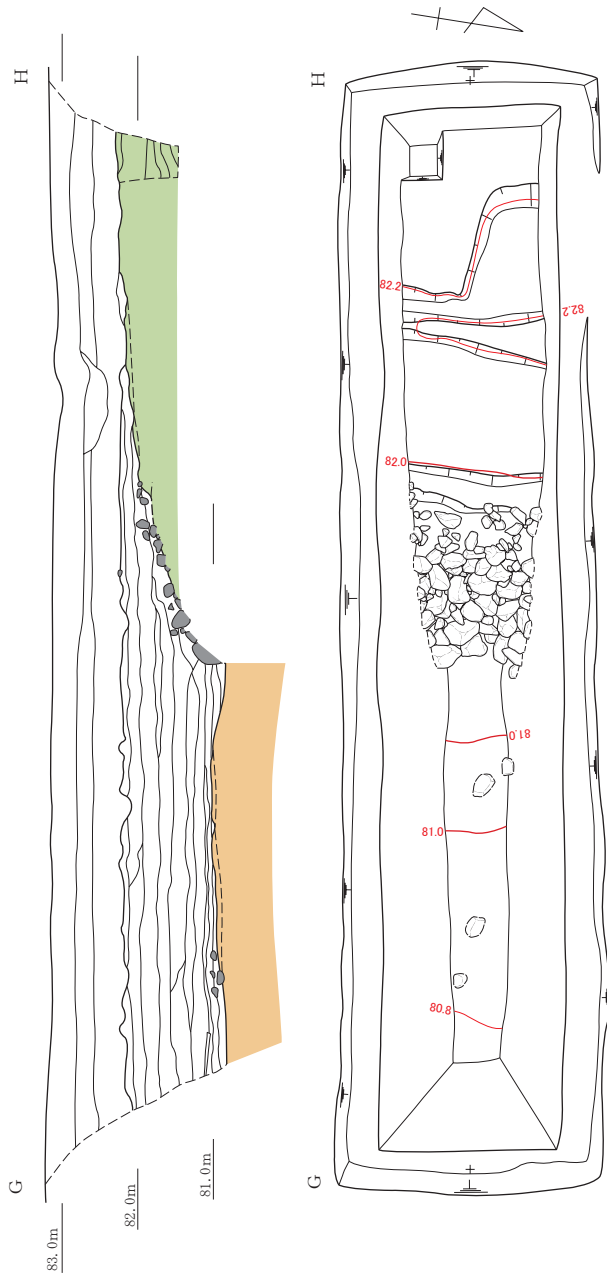


図6 後円部南側・南西側のトレンチ平面・断面図 (S = 1/100)

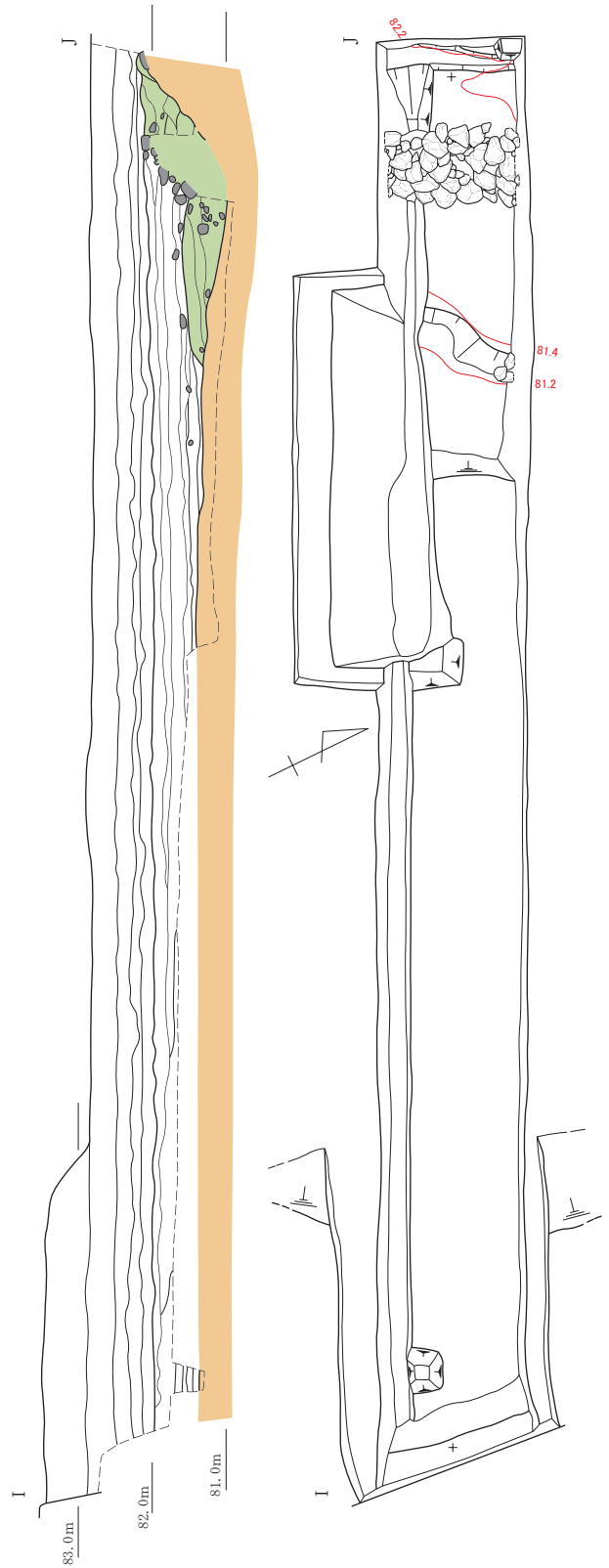
の転落石が集積する状況が確認され、この付近に墳丘端を推定することが可能な状況にあった。

また後述のように、後円部頂の周縁部では西側（第3次調査第2トレンチ、図10）と北側（第3次調査第3トレンチ、図10）において埴輪列が確認されている。加えて後円部2段目と考えられる平坦面でも、北側（第3次調査第3トレンチ）と南側（第3次調査第4トレンチ、図10）で埴輪列が検出されている。これらの位置関係から2条の埴輪列の中心は、現況の後円部頂の平坦面の中心付近に推定され、後円部の中心についても同様の位置と考えることができる。これに第4次調査第1・第2トレンチと第1次調査第1トレンチで確認された墳丘端の位置関係を考え合わせると、後円部径は約72mに復元することが可能である。

前方部では、北側において前方部前面の墳丘端が確認され（第4次調査第6トレンチ）、東側のくびれ部（第4次調査第2トレンチ）と東側面（第2次調査トレンチ）の墳丘端が検出されている。これにより前方部長は20m余に復元される。いっぽうで前方部西側面や西側くびれ部の位置は確認され



第4次調査第1トレンチ

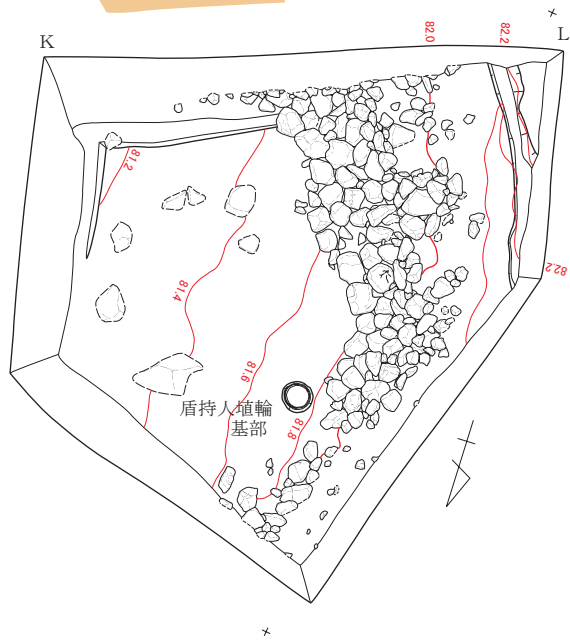
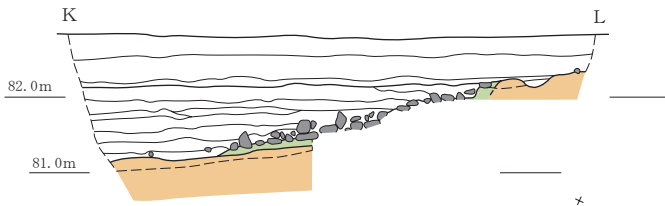


第2次調査トレンチ

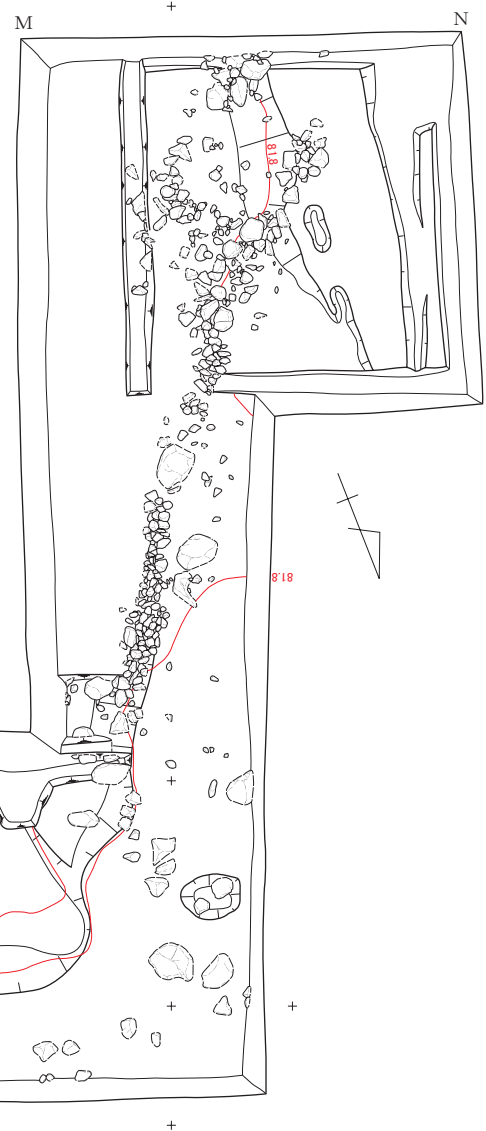
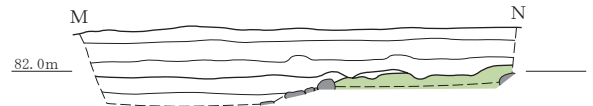
墳丘盛土
  地山



図7 墳丘東側のトレンチ平面・断面図① (S = 1/100)



第4次調査第2トレンチ



第4次調査第3・4トレンチ

盛土 地山



図8 墳丘東側のトレンチ平面・断面図② (S = 1/100)

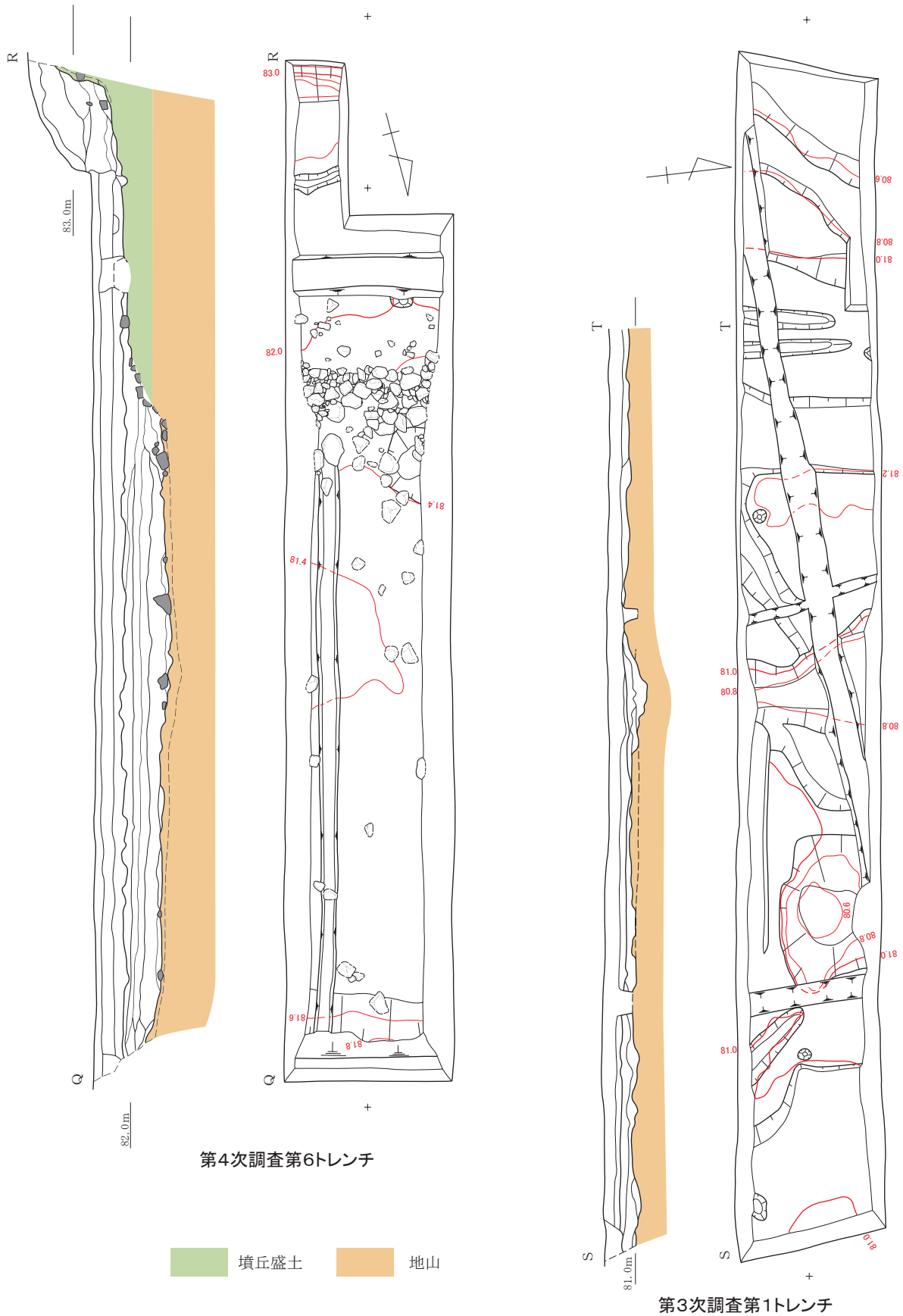


図9 前方部北側・西側のトレンチ平面・断面図 (S = 1/100)



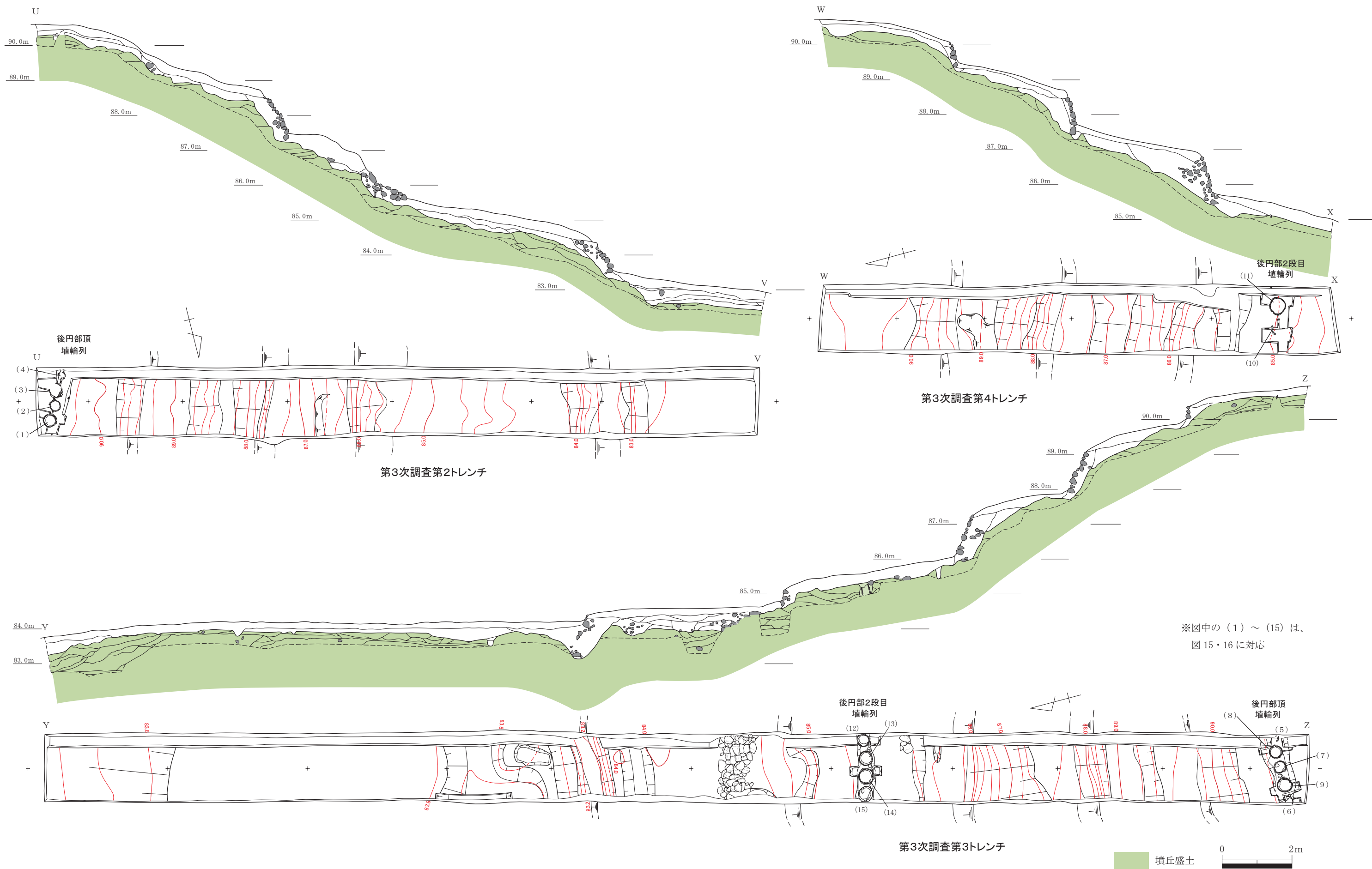
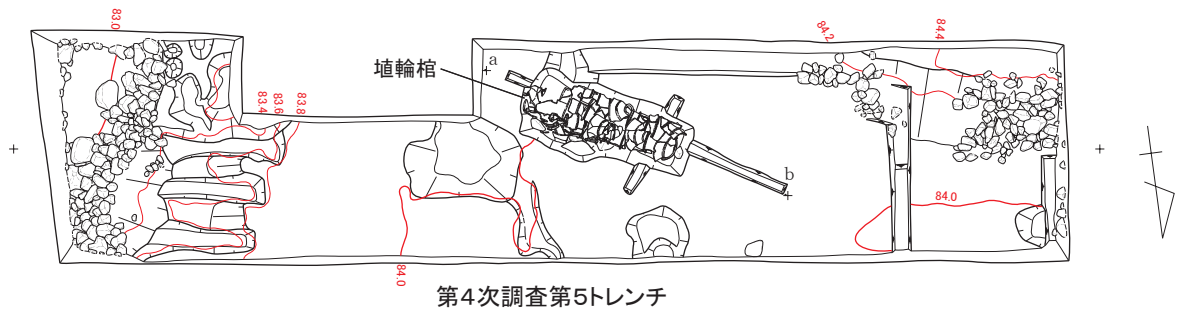


図10 墳丘上のトレンチ平面・断面図 (S = 1/100)



第4次調査第5トレンチ

※図中のa、bは、図14に対応

図11 前方部東側上面のトレンチ平面図 (S=1/100)



ておらず、現段階では前方部幅や墳丘主軸方向を明らかにすることはできない。ただし前方部の西側は第3次調査第1トレンチ（図9）の範囲までは及んでいない可能性が高く、現況の地形状況などを参考とすると、前方部幅は50m余かそれ以下に推定することができる。

このように現段階においては、特に墳丘の西側や南側において墳丘端の位置が未確認であり、墳丘の全体像を復元することは難しい状況にある。暫定的に現状の地形から、墳丘主軸を第3次調査第5トレンチと第4次調査第6トレンチを繋ぐライン付近に推定すると、墳丘全長は約86mに復元することが可能である。ただし正確な墳丘形態については、今後の調査において墳丘主軸や墳丘西側の状況を確認した上で、再度復元を試みる必要がある。

なお前方部北東隅に設置した第4次調査第3・第4トレンチ（図8）では、葺石を伴う盛土の東側面が、周濠外側の立ち上がりへと繋がっていく状況が確認されている。調査の都合上、第4次調査時にはその性格を明らかにできなかったが、この部分に渡り土堤が存在する可能性が考えられる。今後の調査において確認することとしたい。

## (2) 段築

前方部では1段目斜面のほか、1段目平坦面と2段目斜面が確認されており（第4次調査第5トレンチ、図11）、前方部が2段築成であったことが明らかとなっている。後円部では1段目斜面のほか、墳丘中段で埴輪列を伴う平坦面が確認されており、さらにそこから墳頂部の平坦面まで立ち上がる斜面が存在する。この墳丘中段の平坦面は、確認されている墳丘基底との高低差を考えると1段目の平坦面である可能性は低く、この下にもう一段平坦面が存在したものと推定される。現段階では未確認であるが、各段の高低差を考慮すると、後円部1段目平坦面は前方部の1段目平坦面と一連となるものと想定される。したがって後円部中段平坦面は後円部の2段目、墳頂平坦面が3段目に相当することとなる。

なお後円部の2段目と前方部上面（2段目）とは約1.3mの段差があり、その間には葺石を伴う斜面が存在する。この斜面は推定墳丘主軸上に設定した第3次調査第3トレンチのほか、その東側の第4次調査第5トレンチにおいても確認されており、その基底は円弧を描くように東西にのびるものと思われる。また後円部頂と前方部上面を結ぶスロープは存在せず、前方部上面が後円部2段目斜面の中ほどに接続する状況が確認されている。

墳丘基底および各段の平坦面の標高を見ると、墳丘基底は後円部東側（第4次調査第1トレンチ）で81.0m、東側くびれ部（第4次調査第2トレンチ）で81.8m、前方部東側（第2次調査トレンチ）で81.5m、前方部前面（第4次調査第6トレンチ）で81.4m、後円部南西側（第1次調査第1トレンチ）で79.8mとなっており、くびれ部でやや高くなるほかは、地形環境に対応して全体に南西に向かって低くなっていることがわかる。前方部1段目（第4次調査第5トレンチ東端）は83.0m、前方部上面（第4次調査第5トレンチ西側・第3次調査第3トレンチ）は84.0m前後であり、墳丘東側～北側の基底からの高さは、前方部1段目までが1.2～1.6m、前方部上面までが2.2～2.6mということになる。

後円部の2段目は北側（第3次調査第3トレンチ）で85.3m、南側（同第4トレンチ）では85.1mで、削平状況を考慮すると、85.3mでほぼ均一であると考えられる。後円部頂は90.5m前後で墳丘盛土が検出されるが、削平を考慮すると91.0m前後であったと推定される。

これにより後円部高は、東側基底を基準とすれば約10m、南西側を基準とすれば約11mを測り、3段目の高さは6m近くに推定することができる。

### （3）地山と墳丘盛土

墳丘が高まりとして残存する箇所を設定したすべてのトレンチにおいて、墳丘盛土が検出されている。部分的に断ち割り調査を行ったが、地山は検出されておらず、現段階では旧地形の高まりを利用して墳丘が築造された可能性は低いと考えられる。

墳丘の周囲では、地山を掘り下げて周溝が形成されている。東側くびれ部や前方部東側では少なくとも0.8m以上掘削されており、墳丘下部に地山を削り出した部分が存在することがわかっている。なお墳丘東側部分では、葦石が地山を削り出した斜面に直接葦かれるのではなく、黄褐色粘質土などで構成される盛土の斜面に葦かれる状況が確認されている（第2次調査トレンチ、第4次調査第1トレンチなど）。このことから墳丘東側では、地山を掘削して窪地が形成された後、その底面や墳丘側斜面部の一部を埋めるように盛土が置かれ、そこに葦石が葦かれるなどして墳丘完成に至ったと考えることができる。

## 3. 周溝の形態

墳丘周辺に設定した全てのトレンチにおいて、地山が掘削されている状況が確認されている。墳丘北東側に設定した第3次調査第1トレンチ付近では不明瞭であるものの、概ね墳丘を取り囲むように周溝が存在したことがわかる。

このうち前方部北側の第4次調査第3・4トレンチと第6トレンチ、後円部南西側の第1次調査第2トレンチでは、この地山掘削部分の外側斜面が確認されている。墳丘端からの距離は10m前後で、先に見たように現況の地形にも周溝の形態が反映されている。いっぽうで墳丘東側では外側斜面が検出されておらず、東側の市道付近で立ち上がるものと推定される。この部分では外側斜面は墳丘端より15m以上離れていることがわかる。

このように墳丘の周辺には周溝が存在することは明確であるが、その幅は一定しておらず、全体的

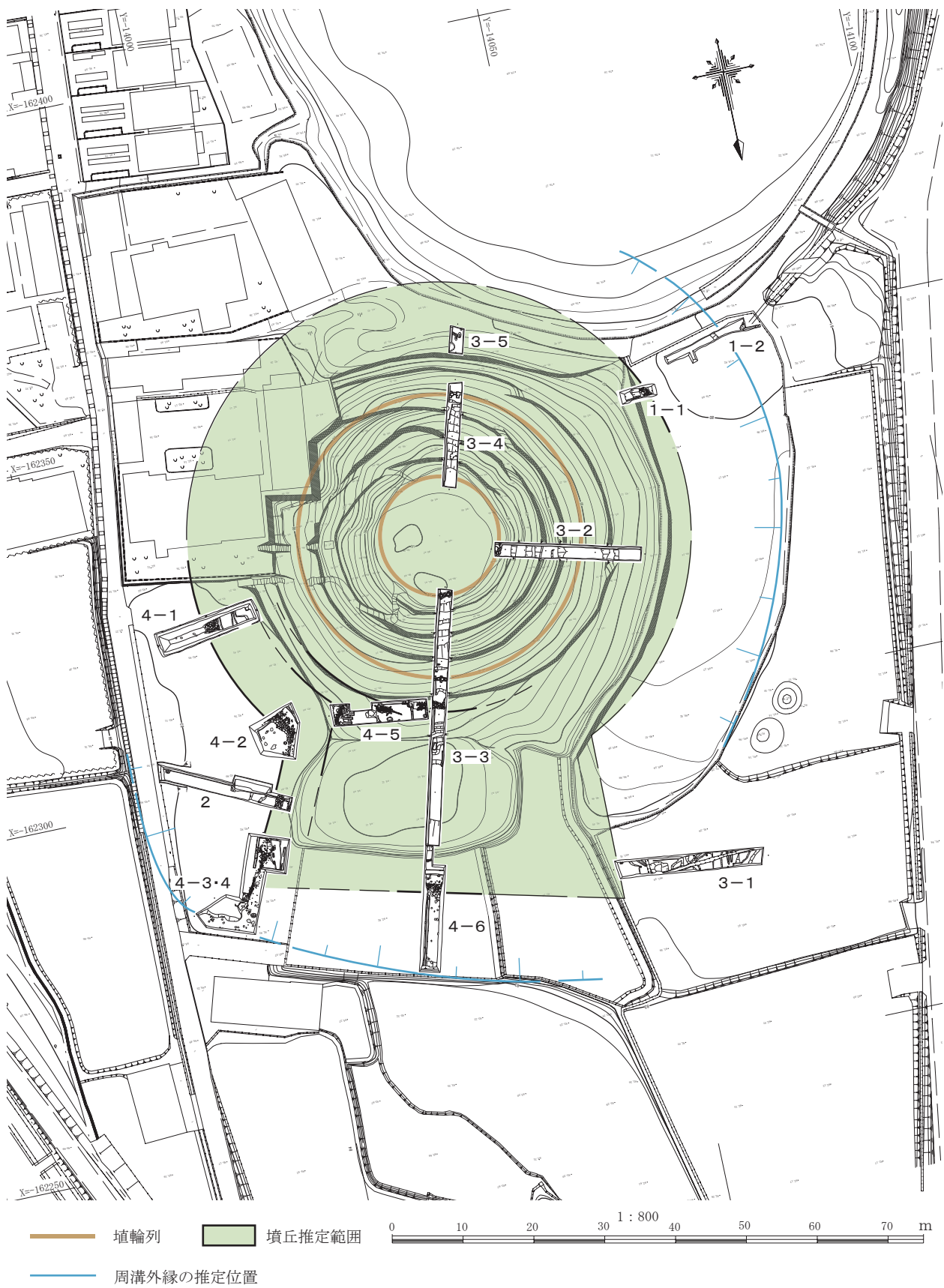


図12 茅原大墓古墳墳丘復元図 (S = 1/800)



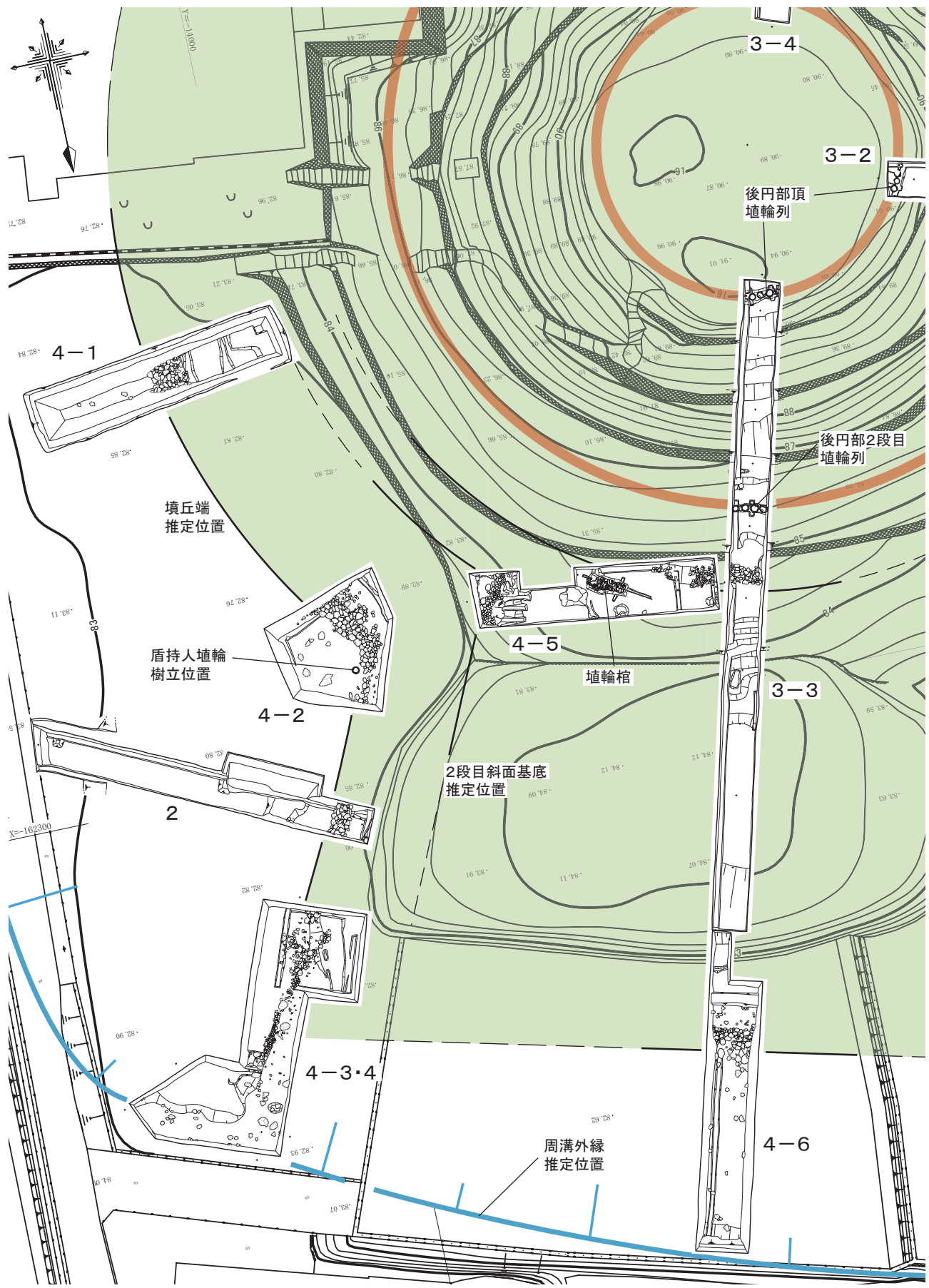


図13 墳丘北東側のトレンチ配置図 (S = 1/300)



な平面形態を推定することは難しい。調査成果からは前方後円形の輪郭である可能性は低く、馬蹄形ないし卵形に推定されるが、整備された形態を持たない可能性も考える必要があるだろう。

なお後円部東側では周溝内で腐植層が確認されており、滞水があったと考えられる。しかしそれ以外の地点では腐植層は確認されておらず、全体に水を湛えるようなものではなかったと推定される。

#### 4. 葺石

これまでに計7箇所のトレンチにおいて、原位置を保った状態の葺石を確認している。後円部では1段目斜面と3段目斜面、前方部では1段目斜面と2段目斜面が検出されており、このほか前方部上面から後円部側へ立ち上がる斜面においても確認されている。使用される石の多くは10～50cm程度の河原石で、いずれの箇所でも上端部分は削平を受けて欠失している。

1段目斜面の葺石は墳丘の東側および北側において検出されている。基底石が並べ置かれ、その上の斜面に石が葺かれるが、両者の石の大きさは30～50cm程度で顕著な違いは見られない。いっぽう前方部2段目斜面の葺石では、基底には40cm程度の大きな石が置かれ、その上には10～20cm程度のやや小さめの石が葺かれており、意図的に基底に大きな石が用いられていることがわかる。前方部上面から後円部側に立ち上がる斜面でも、10～30cmとやや小さめの石が使用されるが、ここでは基底石が並ぶような状況は見られなかった。後円部3段目斜面の葺石は南側でわずかに残存するが、1段目斜面のような大きな石は用いられていないと推定される。

#### 5. 埴輪の配列

##### (1) 円筒埴輪列

後円部頂および後円部2段目の平坦面において、埴輪列を検出している。

**後円部頂の埴輪列** 後円部頂の埴輪列は、後円部上面に存在する円形平坦面の北側と西側において検出された。南側部分でもトレンチを設定したが、後世の削平により失われている状況が確認されている。

北側に設定した第3次調査第3トレンチの南端では、東西に5個体の埴輪（図15-5～9）が並んで検出された。溝状の掘り方に据えられた状況が確認されており、各個体間の間隔は10～15cm程度で、いずれの個体も底部の打ち欠きは見られなかった。各個体の底部のレベルは一様ではなく、最大で20cmの差が存在する。おおむね底部から2条目突帯付近まで残存しており、いずれも円筒埴輪であると推定されるが、現段階では確定的ではない。

西側の第3次調査第2トレンチ東端では、南北に4個体の埴輪（図15-1～4）が並んだ状態で検出されている。断ち割り調査を行ったものの、北側に存在したような掘り方は確認できなかった。最大で3段目まで残存する個体が存在し、5～10cm程度の間隔で据えられていた。底部の打ち欠きは見られず、底部のレベルは北側の3個体（1～3）は5cm以内の差でほぼ揃うが、南端の個体（4）はそれらより15cmほど高い位置に置かれていた。いずれも円筒埴輪であると思われるが、これについても

現段階では確定的とは言えない。

**後円部 2 段目の埴輪列** 南側と北側の 2 箇所を確認されている。西側ではトレンチを設定したものの、削平のためか埴輪列を検出することはできなかった。

北側の第 3 次調査第 3 トレンチ中ほどでは、東西に 4 個体の埴輪（図 16-12～15）が並ぶ状況が確認された。各個体間の間隔は 10cm 前後で、溝状の掘り方に据えられていた。おおむね 3 段目の下半までが残存しており、いずれも円筒埴輪であると思われる。底部の打ち欠きは見られず、底部のレベルは東側 3 個体（12～14）が 5 cm 以内の差でほぼ揃うものの、西端の個体（15）は 20cm 程度高い位置に据えられていた。

南側の第 3 次調査第 4 トレンチ南端では、いずれも円筒埴輪と思われる 2 個体が並んだ状況で検出されている（図 16-10・11）。両者の間隔は約 10cm で、断ち割り調査などを行ったが掘り方は確認されていない。2 個体ともに底部が打ち欠かれており、西側の個体（10）では突帯 1 条分、東側の個体（11）では突帯 2 条分が残存する程度であった。据えられた埴輪の下端のレベルは一様ではなく、西側の個体が約 10cm 高い位置にあった。

**その他の埴輪列** 後円部では 1 段目埴輪列の存在が想定されるが、第 4 次調査段階までは未検出である。また後円部南側の石垣裏込め土より蓋形埴輪（図 17-17）が出土しているが、出土状況から配置箇所を推定することは難しい状況にある。

前方部では第 4 次調査段階まで埴輪列は確認されていないが、周辺のトレンチでは円筒埴輪が少ないうちながらも出土しており、埴輪列が存在したものと推定される。

## （2）その他の埴輪

東側くびれ部の墳端に近い位置では、1 個体の埴輪の基部が樹立した状況で検出されている（図 7、図版 14）。この埴輪の内側およびその周辺では、盾持人埴輪（図版 22）の破片が複数検出されており、盾持人埴輪がこの位置に樹立されていた可能性が高いと考えられる。また、東側くびれ部に近い周溝埋土中からは、鶏形埴輪あるいは水鳥形埴輪と考えられる個体の破片も確認されている。

このほか前方部上面では、壺形埴輪が後円部 2 段目より転落したような状況で検出されている。後円部の埴輪列に壺形埴輪が含まれていた可能性を示唆するものと言えるだろう。

## 6. 埴輪棺

くびれ部に近い前方部上面（第 4 次調査第 5 トレンチ）において、埴輪棺が 1 基確認されている（図 14）。墓壙は、後円部へと立ち上がる斜面に平行する方向に主軸が向けられており、長さ約 2.3m、幅 0.7～1.0m を測る。墓壙埋土上層には、棺上の陥没孔に葺石の転落石が落ち込んだと思われ、20cm 前後の石が複数含まれていた。全長約 2.1m の棺は 3 個体以上の円筒埴輪を使用して作られ、両小口部は壺形埴輪あるいは朝顔形埴輪の口縁部により塞がれる形態である。南東小口側で棺幅が広がっており、埋葬頭位は南東に向けられていたと推定される。棺内からは遺物は見つかっておらず、棺外の裏込め部分より鉄製品が 2 点出土している。

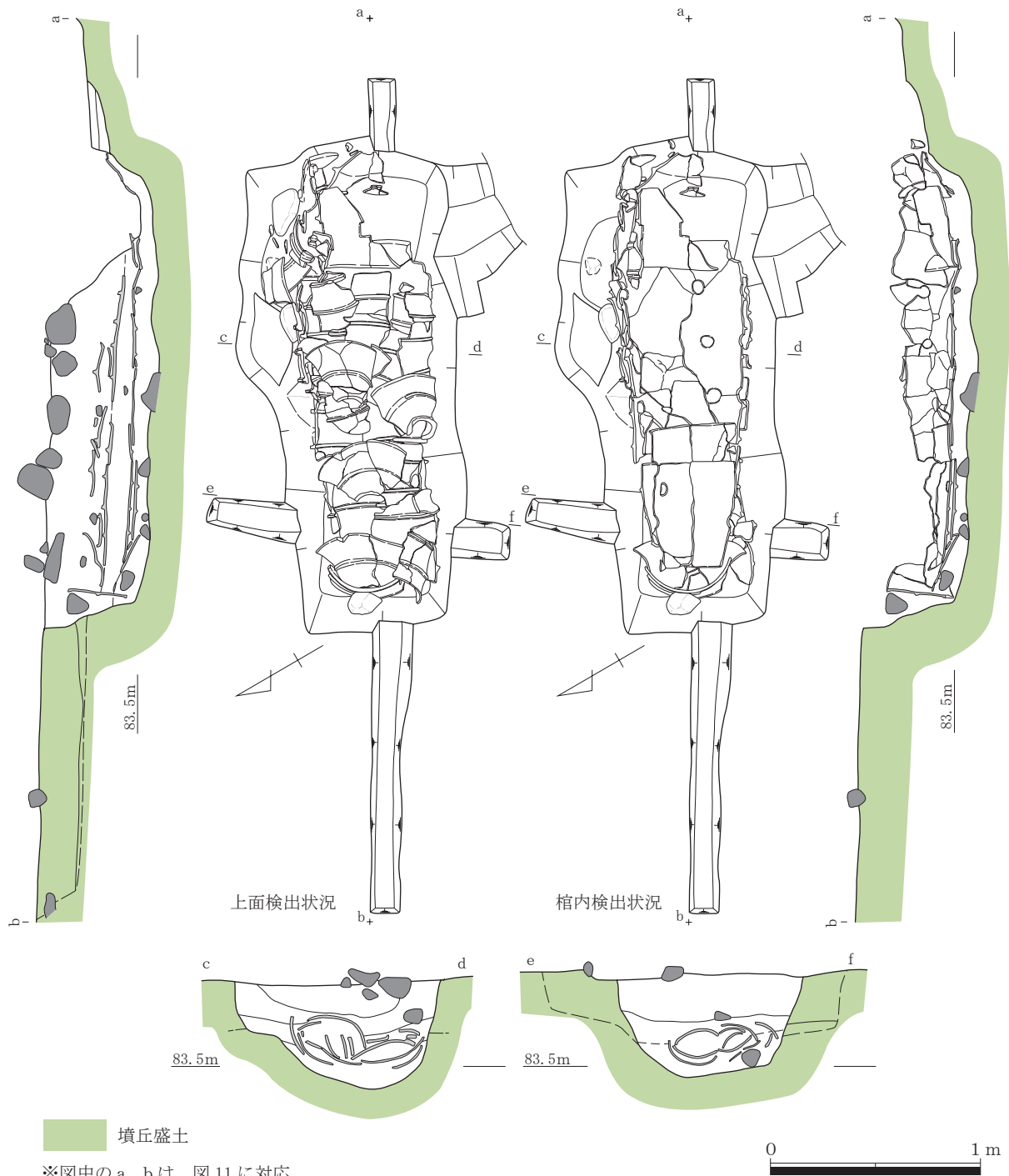


図14 埴輪棺平面・断面図 (S = 1/30)

## 7. 出土遺物

茅原大墓古墳に伴う遺物としては、埴輪棺とともに出土した鉄製品2点をのぞくと、埴輪類に限られる。これまでに円筒埴輪、壺形埴輪のほか、形象埴輪として蓋形埴輪、鶏形あるいは水鳥形埴輪、盾持人埴輪が確認されている。

### (1) 円筒埴輪

埴輪列として樹立した状態で検出された個体のほか、周溝埋土や現代耕作土中より出土した破片が

多数存在する。また前方部上面の埴輪棺に転用された円筒埴輪についても、本来墳丘上に樹立されたものであると考えられる。

埴輪列で確認された個体（図15・16-1～15）は、いずれも底部から口縁部まで復元されるものではなく、最も残存状況のよい個体でも底部から3段目までが残存する程度である。底部径は31～35cmのものが多く、25cm前後の小型の個体（4～6）や、40cmに近い大型のもの（14・15）も存在する。底部高はおおよそ12.5～15.0cm、1条目と2条目の突帯間隔は11cm前後から12.5cm程度であり、底部高に対し突帯間隔がやや小さくなることがわかっている。突帯は1cm以上突出するような突出度の高い個体が多いが、（6）のように突出度の低い個体も含まれている。

透孔は底部に開けられるもの（6）のほか、2段目より上に開けられる個体（8・9）、3段目より上に開けられる個体（1・2・7・12～14）が存在する。透孔の形態は、図示していない破片資料も含めて見ると、円形のもの最も多く、次いで長方形、三角形、半円形の透孔がみとめられる。（9）では、2段目に逆三角形の透孔が2方に開けられるが、3段目は方向を違えて円形の透孔が開けられているようである。多くの透孔が2方向に開けられたものと考えられるが、埴輪棺に使用された個体のなかには、4方に透孔を配するものも含まれていた。外面調整は、一次調整のタテハケののちに二次調整のヨコハケを施す個体が存在する。ヨコハケは（9）などではストロークが長いものではあるが、他の破片資料も含めて、明確な静止痕を持つものは確認されていない。

なお口縁の形態や段構成・突帯の条数については、埴輪列の個体からは確認することはできない。このうち口縁形態については、各トレンチから口縁部付近の破片が多数出土しており、外側に強く外反するものが圧倒的に多いことがわかる。なかには図17の（16）のように外反がそれほど強くない個体も存在し、上端外面に突帯を貼り付ける形態のものもわずかに確認されている。

段構成・突帯の条数については、埴輪棺に使用されたもののなかに4条突帯・5段構成で、器高が約70cmを測る個体を確認することができる。また同じく埴輪棺に使用された別の個体は、底部を欠失しているものの、口縁部以下で7条の突帯と8段分が残存し、残存高は1mを超えている。

## （2）盾持人埴輪

頭部から盾面の上半にかけての高さ約67cm分（図版22）と、後述するように同一個体を構成すると考えられる円筒形の基部が残存する。

顔面部分は縦17cm、横幅16cmで、比較的平面的につくられており、表面には赤色顔料が塗布されている。両目は木の葉形に削り抜いて表現しており、左目は横2.3cm、縦1.1cm、右目は横2.6cm、縦1.3cmを測る。鼻は欠失しているが、縦4cmほどの粘土を張り付けた痕跡が観察できる。口は横約6cm、縦約2cmの半月形に削り抜かれる。顎部分は粘土板を貼り足して作られており、入れ墨の表現と思われる線刻が見られる。

頭部には胃と思われるものを被せた表現が見られる。顔面の上に庇状に張り出した部分は、衝角付胃のように顔面の中央部分が最も高く稜をなし、左右側が低くなる形態である。外面には線刻などの表現が見られず、金属製の胃ではなく、革製など有機物製の胃を表現したものと推定される。



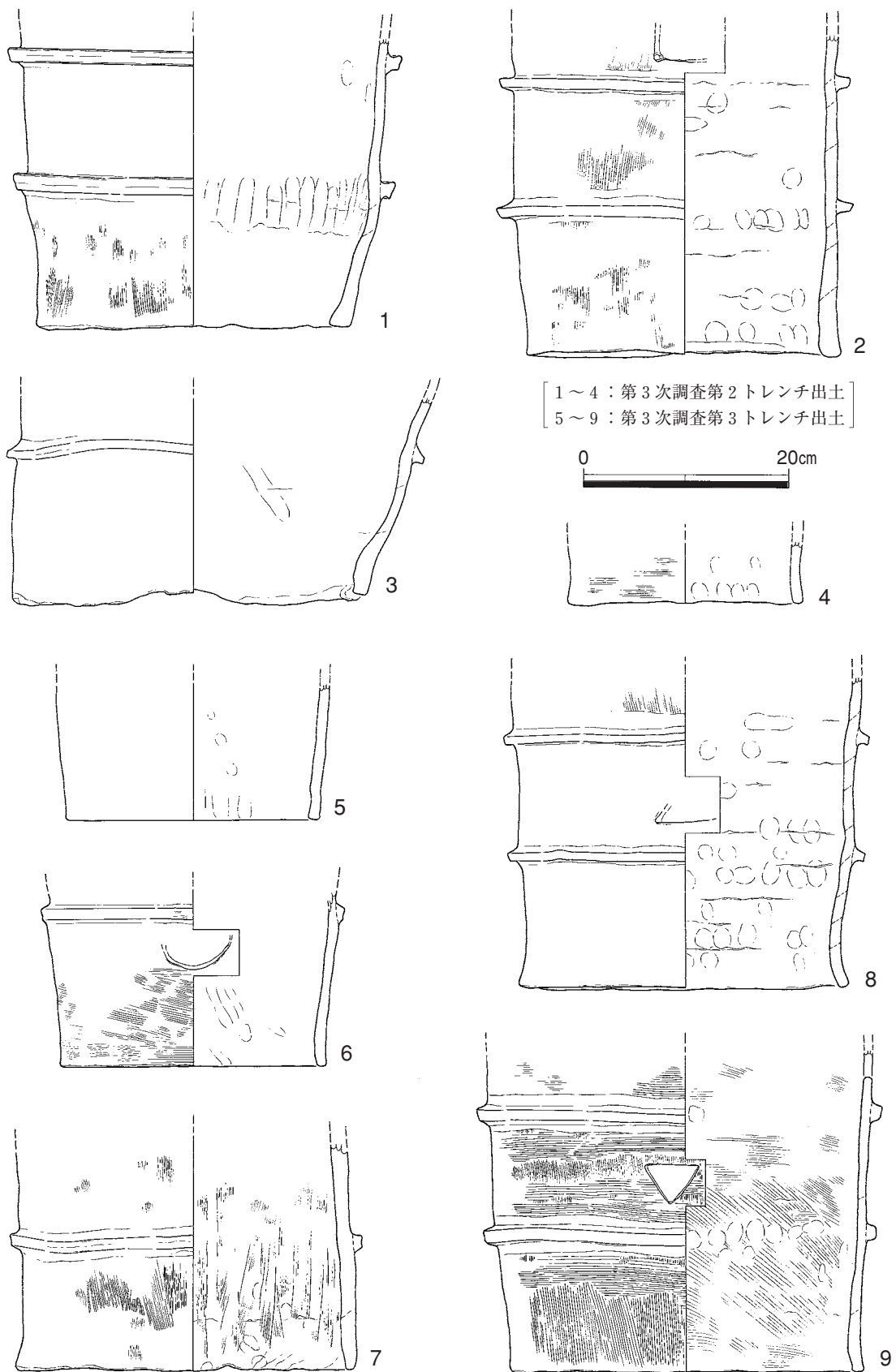


図15 後円部頂埴輪列の円筒埴輪 (S = 1/6)

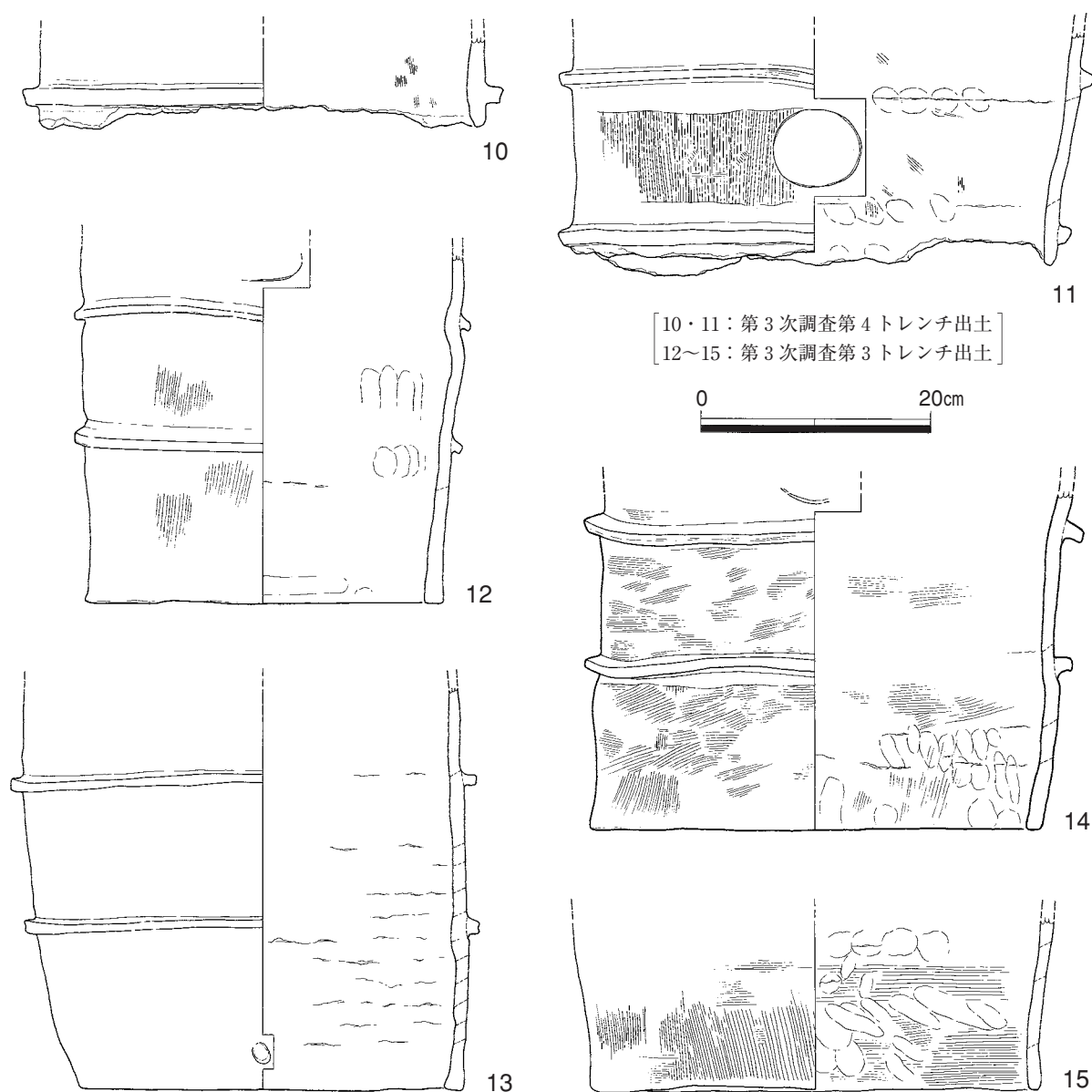


図16 後円部2段目埴輪列の円筒埴輪 (S = 1/6)

盾部分は、円筒部に厚さ1cm余の細長い粘土板を貼り足して作られる。幅約50cm、高さ47cm以上を測り、その輪郭は長方形を呈すると推定される。盾面には線刻による文様が施されており、綾杉文による「Ⅱ」字型の区画が存在し、その内側には菱形文が、外側には鋸歯文が配され、さらにその外側に綾杉文が方形に巡るものと考えられる。なお盾を持つ手の表現は確認されていない。

盾持人埴輪は先に見てきたように、墳丘東側くびれ部の埴端付近に樹立された可能性が高いと判断される。樹立した状態にあった基部は、径30cm余の円筒形で底部から20cm余が残存しており、その内側には盾面部分の破片が複数落ち込んでいた。現段階ではこの埴輪基部と盾面部分との接合関係は確認されていないが、検出状況から盾持人埴輪の基部であると考えてよいであろう。

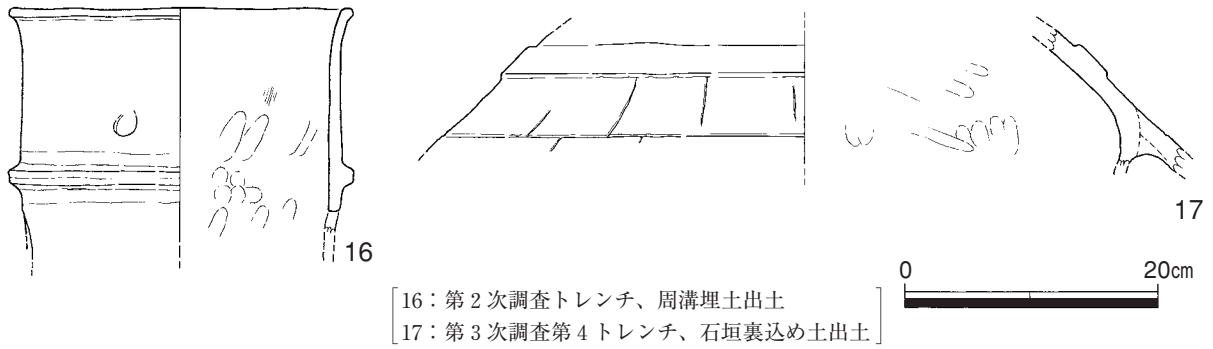


図17 周溝埋土・石垣裏込め土 出土埴輪 (S = 1/6)

### (3) その他の埴輪

蓋形埴輪は後円部南斜面の石垣裏込め土より、破片が数点出土している。図17の(17)は、立ち飾り部の形態は不明であるが、笠部下半に上下段互い違いに放射状沈線を配する表現が見られる。

壺形埴輪は前方部上面において、後円部2段目より流れ落ちたような状況で検出されている。肩部に鏝が付く形態で、体部には2方に配された円形透孔が観察できる。また前方部上面の埴輪棺では、壺形埴輪あるいは朝顔形埴輪の口縁部片が、両小口部に使用されていることがわかっている。

このほか、鶏形埴輪ないし水鳥形埴輪の頸部と思われる破片が確認されている。



くびれ部の葺石と墳丘 (東より)

## 第4章 まとめ

4次にわたって実施してきた発掘調査により、これまで不明であった茅原大墓古墳の姿がしだいに明らかになりつつある。中心埋葬施設については未確認であるが、墳丘の形態や築造時期に関して多くの成果があり、史跡整備を計画していく上で貴重なデータを得ることができた。

墳丘規模については、墳丘主軸が不確定であるという問題が残るが、現段階では後円部径が約72m、墳丘全長は約86mに推定することができる。後円部は3段築成である可能性が高く、前方部は2段築成であることが明らかとなっており、前方部上面は後円部2段目平坦面よりも低い位置にあることが確認されている。各段の斜面には葺石が葺かれ、後円部頂と2段目の平坦面では埴輪列が検出されている。また前方部上面では、埴輪棺の存在が確認された。

周溝の形態に関しては不明瞭な部分が多いが、全体に水が湛えられていた可能性は低く、平面形態も整備されたものとは考えにくい。また前方部北東側では、渡り土堤の可能性が考えられる遺構が確認されているが、これについては今後の調査で確認することとしたい。

各調査では墳丘上に配列された埴輪類が多数出土しており、円筒埴輪や壺形埴輪のほか、形象埴輪として盾持人埴輪、蓋形埴輪、鶏形あるいは水鳥形と考えられる埴輪が確認されている。これらの出土埴輪から、茅原大墓古墳の築造時期は古墳時代中期初頭頃と考えることができる。

出土遺物のうち特に注目されるのは、盾持人埴輪の存在である。盾持人埴輪としては最も古く位置付けられ、加えてくびれ部の墳丘端付近に樹立されていたことが明らかとなったことは、大きな成果であったと言えるだろう。埴輪祭祀の変遷を考える上で今後重要な資料となるものと考えられる。

このような調査成果から、茅原大墓古墳は奈良盆地東南部では数少ない中期古墳であることが明らかとなった。奈良盆地東南部は古墳時代初頭より大型古墳が連綿と築造され続けてきた地域であり、大王墓と見られる全長200m以上の前方後円墳が複数存在している。しかし前期後半以降になるとそうした巨大な前方後円墳は築造されなくなり、当時の政権内におけるこの地域の勢力が、相対的に低下していったものと考えられる。茅原大墓古墳は、そうした勢力変動期に築造された古墳であり、同時期の同地域では傑出した首長墳である。しかしそれ以前に築造された200m以上の巨大前方後円墳と比較すると墳丘規模は格段に小さく、墳丘形態は帆立貝形であり、この地域の勢力衰退が象徴的に表れているとすることができるだろう。

このように茅原大墓古墳は、単に一地域の首長墳であるということにとどまらず、古墳時代の政権勢力変動の様子を伝えてくれる貴重な資料として評価することができる。また周辺には著名な遺跡・古墳や社寺が存在しており、そうした文化遺産が数多く残されているという環境にある。発掘調査成果を活かすとともに、そうした茅原大墓古墳が持つ性格や地域的特性に則し、整備事業を進めていくことが今後の課題である。

# 写真図版







茅原大墓古墳と三輪山  
(西より)



茅原大墓古墳と箸墓古墳  
(南東より)





茅原大墓古墳全景  
(下が北)



第4次調査地全景  
(下が北)





第1次調査第1トレンチ（西より）



後円部南西側の転落石  
（西より、1次1tr）



第1次調査第2トレンチ（東より）





第2次調査トレンチ全景（東より）



前方部東側面の葺石（東より、2次tr）





葺石裏側の盛土（北より、2次tr）



第3次調査第1トレンチ全景（西より）





第3次調査第2トレンチ全景（東より）



後円部頂西側の埴輪列（北西より、3次2tr）





第3次調査第3トレンチ全景①（南より）



第3次調査第3トレンチ全景②（北より）





後円部頂北側埴輪列の上面検出状況（西より、3次3tr）



後円部頂北側の埴輪列（北東より、3次3tr）





後円部2段目北側の埴輪列（北東より、3次3tr）



後円部北側斜面の葺石（手前は前方部上面、3次3tr）





第3次調査第4トレンチ全景（北より）



後円部2段目南側の埴輪列（南より、3次4tr）





第3次調査第5トレンチ全景（南より）



第4次調査第1トレンチ（東より）





周溝内埋土断面（北東より、4次1tr）



後円部東側の葺石（東より、4次1tr）





東側くびれ部付近の転落石・埴輪検出状況（東より、4次2tr）



東側くびれ部（東より、4次2tr）





盾持人埴輪基部とくびれ部付近の葺石（東より、4次2tr）



第4次調査第3・4トレンチと墳丘（北東より）





前方部東側 2 段目斜面の葺石（北東より、4 次 5 tr）



埴輪棺上面検出状況①（西より、4 次 5 tr）





埴輪棺上面検出状況②（南より、4次5tr）



埴輪棺棺内検出状況①（南より、4次5tr）





埴輪棺内検出状況②（西より、4次5tr）



後円部北東斜面の葺石（手前は前方部上面、4次5tr）





第4次調査第6トレンチ全景（北より）



前方部前面の葺石（北より、4次6tr）





周溝外側の立ち上がり（南西より、4次6tr）



前方部前面の周溝内埋土断面（南西より、4次6tr）





出土埴輪①



出土埴輪②





盾持人埴輪



顔面部分



頭部の側面

# 報告書抄録

書名	史跡 茅原大墓古墳
副書名	第1次～第4次発掘調査概要報告書
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第36集
編著者名	福辻淳
編集機関	桜井市教育委員会文化財課
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366
発行年月日	2011年8月5日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
茅原大墓古墳 第1次	桜井市 茅原706	292061	11-D-519	34° 32' 12"	135° 50' 50"	桜井市教育委員会	23㎡	池堤改修に先立つ調査
茅原大墓古墳 第2次	桜井市 茅原723-1						44㎡	史跡整備に先立つ確認調査
茅原大墓古墳 第3次	桜井市 茅原722-1他						203㎡	史跡整備に先立つ確認調査
茅原大墓古墳 第4次	桜井市 茅原723-1他						238㎡	史跡整備に先立つ確認調査

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
茅原大墓古墳第1次	古墳	墳丘、周溝	埴輪類、木製品	
茅原大墓古墳第2次	古墳	前方部葺石、周溝	埴輪類	前方部東側の墳丘端を確認
茅原大墓古墳第3次	古墳	後円部埴輪列・葺石	円筒埴輪、蓋形埴輪	後円部頂・2段目埴輪列を検出
茅原大墓古墳第4次	古墳	後円部葺石、前方部葺石、周溝、埴輪棺	円筒埴輪、壺形埴輪、盾持人埴輪など	前方部上面で埴輪棺、東くびれ部で盾持人埴輪を検出



桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第36集

## 史跡 茅原大墓古墳

第1次～第4次発掘調査概要報告書

発行 桜井市教育委員会  
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2番地

FAX 0744-42-6005

TEL 0744-42-1366

年月日 平成23年8月5日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464

